



# 十和田市立 新渡戸記念館だより

Nitobe Memorial Museum Newsletter

第56号



元朝参りの夜の太素塚



月星キャンドルのライトアップ



年越しの頃には多くの参拝客が



太素塚に集合したわ組有志の皆さん



「十和田地固め唄」を奉納するわ組有志

## 「十和田地固め唄」に込められた思い — 稲生町 中央町内会・わ組 —

昨年の秋まつりに引き続き稲生川上水150年記念元朝参りで、稲生町中央町内会「わ組」（松本柳太郎 組頭）有志の方々が、神輿担ぎ唄「十和田地固め唄」と「十和田囃子」を太素塚に奉納して下さいました。わ組の皆さんの活動や地域に対する思いに心を打たれ、こうした活動に至った経緯などをメンバーの平野公彦さん、黒沢誠一さんにうかがいました。

### Q「わ組」の活動で目指すところ、思うことは？

— 十和田市を開拓した先祖を大切にしたいということです。そして、祭りを通じて人をつくるということ。そのために子供たちも巻き込んで、子供たちの参加をうながすようにしています。教育の「育」を地域の人間がやらないとだめだと思うんです。秋まつりに参加した子供たちに、十和田市の歴史背景を伝えたいんです。“新しい町だから伝統がない”と言われるかもしれないけど、伝統がなかったら、今からでも伝統をつくれればいい。150年唄われてきた唄を、また150年唄い続け、伝えていけば、300年の歴史が出来るんですから。みんながふるさとへの思いを深めて、祭りを通して地域のアイデンティティの構築ができればいいなど。地固め唄を練習し始めようとしたとき、子供たちは、唄ってくれないかなと思っていたんですが、小学生の低学年の子供たちが身体をよじりながら楽しそうに唄うんですよ。そんな子供たちに地域の外に出て行ったときでも、一節唄えるようになって、自分にも自分の育ったところにも誇りや自信を持って、話せるようになってPRして欲しいと思います。

今後の祭りについて思うのは、できれば三本木稲荷神社から太素塚まで、太素塚から神社までを歩きたいと思います。本来の祭りの意味を考えて、太素塚通りも門前町のようなイメージになればいいと思うんです。地域も日本も苦しいときだからこそ、みんなでまとまって、現実の苦しさを地域でのりこえたいという願いで活動しています。

### Q「十和田地固め唄」をなぜ作ろうと思いましたか？

— たえば深川では、<sup>とびしよ</sup>職の人たちが裏方として町内をしきっています。木遣りを唄い、神輿を担ぎ、それが普遍的なものとして残っているんです。こうしたアイディアは、開拓でできた我々の町にも取り入れることができるのではないかなと思ったんです。十和田にはこういった唄が残っていなかったんですが、開拓をした新渡戸傳さんの故郷の花巻に行ってみたところ、江戸のころから水利工事の時に唄われていた「花巻地固め歌」を記憶している人がいて、70歳ぐらいの方でしたがその方に教えていただき、歌詞を考えました。“唄う”ということは大人から子供まで一緒にできる。そして唄を唄うことで、途切れてしまった歴史をつなげていけるような気がするんです。労働歌だから、いろいろな背景も伝えてくれる。開拓の励みにもなったかもしれないし、愚痴もあったかもしれない。仲間と笑いながらつくったのかも。即興でつくった唄だから、唄い手のその時の心境が表れているだろうし、唄の詩や、当時の人の思いなどを想像すると面白いです！

地域に対する思いを熱く語って下さった(左から)平野さんと黒沢さん



— 素晴らしいお話ありがとうございました。記念館も地域の一人として皆さんと心をつなげて活動していきたいと思っています。今後とも宜しくお願いします。



## NEWS

### 2008年12月21日 中央病院エントランスホールにて 稲生川上水150年記念ピアノリサイタル開催

十和田市立中央病院（蘆野吉和院長）のご協力により、同院エントランスホールにて稲生川上水150年記念・大塚英一郎ピアノリサイタルを開催しました。大塚氏は音楽学博士である新渡戸常憲館長代理の後輩にあたり、そのご縁から今回演奏をお願いしました。当日は夕方から急に大雪となったにもかかわらず、入院患者の方や市民およそ150人が来場し、美しいピアノの音色を堪能しました。



華麗な演奏を披露する大塚氏(中央病院にて)

### 十和田市立中央病院における 総合芸術活動に新渡戸館長代理が着手

単なる病気の治療に留まらず、全人的な痛み（トータルペイン）を取り除き人間らしい生き方を追求する“緩和ケア”といった理念から、芸術に満ち溢れた新しいコンセプトの病院を提唱する蘆野吉和十和田市立中央病院院長のもと設立した総合芸術部門「アルタ・ノヴァ」の会長に、館長代理が就任しました。同会はエントランス大ホールなどの院内施設で音楽をはじめとする様々な芸術イベントを開催し、病院関係者、患者、利用者、そして市民に芸術体験を通して、その楽しさや素晴らしさを知ってもらい、真に豊かな生き方を見つけるための一助となることを目的に稲生川上水150年記念ピアノリサイタルを皮切りとして活動を始めています。



大塚英一郎夫妻(右)とともに。中央が館長代理。左は指揮者の菅野宏一郎氏



新しく仲間入りした稲生川工事体験ツール「もっこ」

### 稲生川工事の体験学習ツールに 土砂を運ぶための「もっこ」が仲間入り

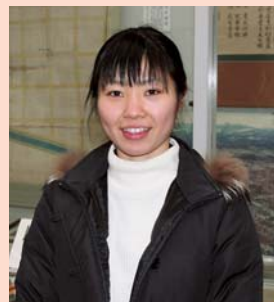
郷土史愛好家・沢口騏三夫さんの協力により、市内切田見世の小笠原正さんに昔の土木工事や農作業で土砂などを運搬するときに使用した畚（もっこ）を制作、寄贈いただきました。記念館では、現在館内に設置しているトンネルを掘る道具「ばんづる」「なかづる」「てんばづる」のレプリカに、この「もっこ」を加え、三本木原開拓の体験学習ツールとして、小学校の社会科見学などで今後活用していく予定です。

### 博物館実習生レポート

#### 10日間の実習を終えて

平成20年度第Ⅱ期博物館実習生 [期間：平成21年1月27日(火)～2月7日(出)]  
北里大学獣医畜産学部動物資源科学科4年生 小宮山 園実

今回の実習では、展示補足資料としての紙芝居の脚本作りや、閲覧用図録の目録作成、和装本の取り扱い、来館者への対応、館内外の清掃など、様々な実務を経験させていただきました。新渡戸記念館での実習を希望した理由の一つに、第二の故郷である十和田市のことをもっと知りたいという思いがありましたが、紙芝居の脚本を考えるにあたって新渡戸傳翁や三本木原開拓について改めて勉強し、理解を深めることができたのでよかったです。さらに、紙芝居の脚本を作成したことで館内に存在する多くの解説や二次資料の裏には作った人の配慮があるということに気付くことができました。普段は見過ごしがちなことですが、こういったことを頭の片隅におき、感謝の気持ちを持って見学することで、資料への理解が深まるだけでなく、当時の様子や資料に込められた思いを感じることができるのだと思います。また、実習を通して常に感じていたことがあります。それは「つながり」の大切さです。博物館や博物館で働く人々は、人と人、人と物（資料）、地域住民と博物館、教育施設やその他施設と博物館、過去と現在そして未来…、などをつなぐ大切な役割を担っています。とくに印象的だったのは、新渡戸記念館が、単なる“地域”を自ら誇ることができる“郷土”へと再構築する役目を担っており、その裏側には、多くの地域住民の方の支えがあるということでした。このように、様々なつながりを大切にしていくことは、博物館が私達にとってより身近な存在となるために欠かせないことであることがわかりました。最後になりましたが、丁寧なご指導のおかげで、大切なことに気付き、貴重な経験を積むことができ大変感謝しております。お忙しい中、実習を受け入れて下さって本当にありがとうございました。



小宮山園実さん



開催報告 稲生川上水150年記念

# 収蔵資料展 2008

## — 新渡戸稲造旧蔵書 —

平成20年11月25日(火)～21年 2月28日(土)

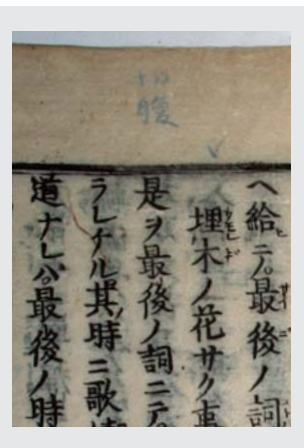
当館収蔵の新渡戸稲造旧蔵書およそ7000冊の中から今回は二期 [11月25日(火)～1月11日(日) / 1月13日(火)～2月28日(土)]に分けて展示替えを行い、異国船関係資料と軍記類合わせて25点を展示しました。

### 第一期展示 異国船関係資料

新渡戸稲造旧蔵書には多岐にわたる分野の書籍が含まれていますが、その中から、幕末・明治維新期に成立、出版された異国船に関する資料を中心に第一期展示で紹介しました。江戸時代、西洋船舶を総称して「異国船」と呼んでいます。旧蔵書の中には異国船に関する資料、特に幕末のペリー来航に関する記録類が多く見られます。新渡戸家が属した南部盛岡藩は、安政2年(1855)から東蝦夷地(=箱館表山岬を主として恵山岬から幌別まで)を持ち場として、異国船に対する北方警備を幕府より仰せ付けられています。当時勘定奉行だった稲造の父・新渡戸十次郎は、陣場奉行として北海道沿岸ならびに下北半島の大砲台場建設にかかわり、『松前持場見分帳』(安政2年)をはじめとする詳細な記録を残しています。異国船資料に押された蔵書印を見ると、新渡戸稲造本人が後に収集したと思われる資料もありますが、父・十次郎が北方警備の要職にあったことを考えれば、新渡戸家には異国船や異国についての情報が自然に集まる環境にあったと考えられます。そうした家庭の中で稲造の国際人となる素地もまた育まれたと言えるでしょう。



展示資料より  
新渡戸稲造旧蔵書『平家物語』  
表紙と稲造による書き込み部分



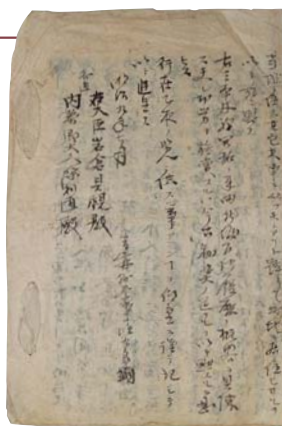
### 第二期展示 軍記類

旧蔵書には中世、鎌倉時代から室町時代にかけて成立した『太平記』『平家物語』、江戸時代に成立した『太閤記』など、古の侍たちの合戦を主題とする軍記類も多く含まれており、第二期ではこうした軍記類を展示しました。新渡戸稲造の祖父・傳は、少年時代から軍記物などの歴史物を特に好み、そこから「興廢治乱の道を知ること志となせり」と日記に記しています。蔵書にはそうした祖父から受け継いだ書籍も多く含まれていると考えられます。また、軍記類から影響を受けて成立した江戸時代の伝奇小説『南総里見八犬伝』(曲亭馬琴著)について、新渡戸稲造は5歳の頃、父・十次郎から囲炉裏ばたで読んでもらったことを思い出として語っていますが、かつて軍記類やそこから派生した大衆文芸が侍の武勇伝や英雄譚、そして「武士道」を子供たちに伝える一翼を担っていたと、稲造は著書『BUSHIDO—the soul of Japan』(英文 武士道)において指摘しています。『BUSHIDO』には各所に侍の合戦におけるエピソードが引用されていますが、蔵書中の軍記類には稲造によると推察される書き込みが多く見られます。中でも『平家物語』には「切腹」に関する記述部分をはじめ、30か所以上の書き込みがあり、稲造の「武士道」形成の過程を伝える貴重な研究材料と考えられます。

## トピックス

### 廣澤安任氏の曾孫様から 明治天皇三本木御巡幸関係資料を寄贈いただく

廣澤安任氏の曾孫である廣澤中任さん、季任さん、春任さんご兄弟(東京都在住)から、1月23日(金)、明治天皇三本木御巡幸関係資料「右大臣岩倉具視、内務卿大久保利通宛、青森県参事塩谷良翰差出文書」1点を寄贈いただきました。この文書は明治9年(1876)明治天皇東北御巡幸において7月12日当地三本木の旧開拓事務所・新渡戸邸に御小休になられた折、塩谷県参事が三本木原開拓の次第を取次がれた時の上申書控えと見られます。廣澤安任氏の直筆草稿類の束の中から見つかったとのことで、差出人・塩谷県参事は安任氏と親交があり、その縁からこの資料が安任氏の手元にあったのではとのお話しでした。



署名部分



冒頭部分



ひろさわやすと  
**廣澤安任 (1830-1891)** 会津藩士・廣澤庄助の二男。幼名・富次郎。斗南藩少参事。廃藩置県翌年の明治5年(1872)、現三沢市谷地頭に日本初の民間洋式牧場「開牧社」開設。英国人二名を雇い入れ、英国製農具を輸入、計画的かつ大規模な牧場経営を行う。明治9年東北御巡幸の折には三本木で明治天皇に拝謁し、同牧場の牛馬が天覧の栄を受けた。明治11年の著書『開牧五年紀事』には福沢諭吉が序文を贈っている。内務卿・大久保利通など政府要人から入閣を勧められるも「野にあって国家に尽くす」と北辺の開拓に一生を捧げる覚悟を語った。牧場経営に成功し、角管村(現新宿区)に牛乳販売所を設置。更なる事業拡大の途中インフルエンザで没す。享年62歳。

写真提供: 三沢市先人記念館

詳しくは>> 三沢市先人記念館 <http://senjin.misawasi.com/>



## mini NEWS

### 資料の寄贈 >>詳細p.2, 3

- ・廣澤中任さん、季任さん、春任さんご兄弟（東京都／廣澤安任氏曾孫様）より「右大臣岩倉具視、内務卿大久保利通宛、青森県参事塩谷良翰差出文書」1点
- ・小笠原正さん(市内切田)より土砂運搬具「もっこ」1点

ありがとうございました

### 関連情報

#### ▶青森テレビのTV番組「おしゃべりハウス」“おしゃべり検定”コーナーで新渡戸傳を紹介

（株）青森テレビのTV番組「おしゃべりハウス」あおもり検定紹介コーナー“おしゃべり検定”では、公式ガイドブックを使用して各分野の講師を招き、クイズ形式で青森県について学んでいます。1月27日(火)放映の同番組で、青森県立郷土館・竹村俊哉学芸員が十和田市の歴史について出題し、「十和田市の礎を築いた人は？」として三本木原開拓の祖・新渡戸傳を紹介しました。



放映のテレビ画面より

#### ▶十和田市文化財保護協会で「江渡屋忠兵衛屋敷跡」ならびに「中振渡船場跡」に解説板を設置

十和田市中振にあった江渡屋忠兵衛屋敷は三本木原開拓着手当初開拓事務所として使用され、開拓地視察に来た南部藩主・利剛公もここで御小休されたという記録が残っています。十和田市文化財保護協会では、近くの中振渡船場跡とこの忠兵衛屋敷跡について解説板を作成し、当館で解説文の監修と新渡戸傳翁写真ならびに中振渡船場図の写真を提供しました。

#### ▶奈良女子大学戸祭教授の研究チームが日本地理学会で新渡戸十次郎関係資料について発表

昨年10月岩手大学において開催された日本地理学会秋季学術大会で、平成19年に当館で調査を行った研究チームの代表である奈良女子大学文学部戸祭由美夫教授と同大学博士研究員村上由佳さんが、新渡戸十次郎旧蔵南部盛岡藩蝦夷地陣屋・大砲台場絵図ならびに十次郎による箱館・東蝦夷地見分記録『松前持場見分帳』について発表を行い、南部盛岡藩の蝦夷地警衛構想を明らかにする上で重要な資料であることなどを指摘しました。

#### ▶十和田市郷土館企画展『会津から十和田へ』で会津藩士の当地移住への新渡戸傳のかかわりを紹介

十和田市郷土館冬季企画展「会津から十和田へ」[会期：平成21年2月14日(土)～3月10日(火)]で戊辰戦争後、会津藩が斗南藩として現在のむつ市を中心とする青森県内に移封された折、新渡戸傳が三本木にも会津藩士を受け入れ移住させた事を紹介しており、展示用に当館から傳の日記『太素日誌』の写真等を提供しました。

### 活動報告

#### ▶館長がみちのく銀行上十三地区OB会で講話

1月28日(水)当館を会場にみちのく銀行上十三地区OB会が行われ、参加の方々には解説を受けながら館内を見学した後、三本木原開拓における経済振興策を中心とした館長の講話を興味深く聞いていました。

#### ▶平成21年度企画展は稲生川土地改良区と協力し、稲生川と農業をテーマに開催予定

本年秋開催を予定している平成21年度企画展は稲生川の大切さを改めて見つめなおし、特に農業とのかかわりにスポットをあてたものとして稲生川土地改良区に協力いただく方針で、1月21日(水)土地改良区において第一回打ち合わせ会を開催しました。

#### ▶「世界に通ずる“ローカル博物館”をめざして市民との共創活動を実施中

昨年から活動目標として「世界に通ずる“ローカル博物館”」を掲げ、積極的に市民との共創による活動を展開しています。例えば館長代理による中央病院総合芸術活動をはじめ、十和田市内のボランティアガイド団体の連携強化を目的とする「十和田ふるさとガイドネットワーク」(仮称)へのオブザーバーとしての参画、市民アート活動団体「アートチャンネルトワダ実行委員会」への参加や、稲生町中央商店街フリーマガジン「ちょこっと」ならびに十和田市現代美術館との協同企画記事掲載など、記念館もまちの活性化の力となるよう「まちづくり拠点機能」を強め、一層親しまれる館を目指します。



協同企画記事が掲載された「ちよこっと」第5号

#### ▶新渡戸記念館指定管理者契約を更新

太素顕彰会は平成21年度から5年の契約で十和田市立新渡戸記念館運営にかかわる指定管理者となりました。

### 編集後記

武蔵野音楽大学教授でピアニストのヤン・ホラーク先生が1月18日、脳腫瘍のため自宅で亡くなられました。(享年65歳)ホラーク先生とは5年前から始まったチェコ音楽コンクール(主催：匂坂恭子・元大東文化大学文学部教授)を通じて知り合い、奥様の井上道子先生(元尚美学園大学教授)と共に私もピアノ部門の審査員をご一緒させていただきました。心からご冥福をお祈り申し上げます。そういえば大晦日の雪の太素塚は無数のキャンドルの炎でとても幻想的な雰囲気でした。我々生きとし生けるものへの賛歌、そして死者への追憶、深々と止むことなく降り続く雪…。春はもう間近にきています。

(音楽学博士・館長代理 新渡戸常憲)

2006年チェコ音楽コンクールにてホラーク先生(左)とともに



### ■ご利用案内

- ・開館時間：午前9:00～午後4:00
  - ・休館日：毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始(12/29～1/3)
  - ・観覧料：大学生・一般210円(団体178円)
  - 小・中・高校生52円(団体42円) ※団体は20名以上
- 十和田市民は観覧料が無料となっています



十和田市立 新渡戸記念館

Nitobe Memorial Museum

URL [www.towada.or.jp/nitobe/](http://www.towada.or.jp/nitobe/)

発行日

2009年3月1日

編集・発行

太素顕彰会・十和田市立新渡戸記念館  
〒034-0031 青森県十和田市東三番町24-1  
Tel & Fax : 0176-23-4430  
Email : [nitobemm@hi-net.ne.jp](mailto:nitobemm@hi-net.ne.jp)  
株式会社 岩間印刷

印刷